（深見実郎氏提供新聞切抜。紙名不明）

競技のあと、右の記事にもあるように一同は広小路まで練り歩いたが、本校側の生徒たちは余奮なお治まらず、翌十三日には今度は銀座まで仮装行列をくり出した。例によって裸踊りを始めるのではないかと、GHQがサイドカーで最後まで跡を追い、休憩時間に生徒がそれをやろうとしたが抑えられて到頭できなかったという。これはサイドカーに乗って行った田原氏（前出）の談である。この日のことも滑稽な写真入りで次のように報道されている。

爆笑をまく行列

上野美術學校假装行列隊は女をまじへて三百五十名が、十三日午前十時半上野をふり出しに神田、日本橋、銀座と練り歩いた、二頭の駿馬にまたがつた騎士の露拂ひに〃美を愛するてふ乙女等よ、この姿をなんと想ふ〃とのプラカードをかつがせロダンの天使等を護衛に仕立てるなど各科生が突飛な着想を競つてものした動く珍藝術は果然街に〃爆笑旋風〃を巻き起した

（昭和二十一年十一月十四日『毎日新聞』）

第一回芸術祭は生徒たちが発案、計画し、学校当局がそれを応援するというかたちで行われた。食糧難と物資不足の甚しい時代であったにも拘らず、かくも盛大に大らかに祭りを開き成功させた生徒たちに敬意を表したい。

⑫ 文化講座

本年度末に近い頃、本校は文化講座を開いた。これは「文化日本建設の基礎は国民一般の教養の向上にある」のだから、学校拡張の一環として文化講座を開きなさいという文部省社会教育局長の通達によるもので、文部省から経費六百円が支出された。この通達は官公私立大学、高等専門学校、師範学校および社会教育団体に対してなされたもので（二十一年八月二十二日）、講義内容について数項目の指示があったが、本校が開いた講座は「文化の各領域に亙り、新文化建設の方向を示唆し、その意欲昂進に関するもの」という項目に該当する。左記はその報告書控えである。

文化講座ノ件

標記ノ件ニ関シテ左記要項ニ依リ開催　文部省ニ報告致シマス

一、開催場所　東京美術学校講堂

一、開催期日　昭和二十二年

二月　八日　土曜日
二月　十五日　土曜日
二月二十二日　土曜日
自午後一時
至午後四時

一、講義題目及講師　彫刻ト平常生活　東京美術学校教授　石井鶴三

漆ノ話　東京美術学校教授　松田権六

一、聴講者概数　六〇〇名

別の報告書控えには聴講者数男八六〇名、女四〇〇名、計一二六〇名、講義時数各五時間、謝金各三〇〇円と記されている（「自昭和二十一年三月至昭和二十二年三月文部省関係生徒課」）。

⑬ 終戦前後の学生生活

白根光夫

〔本篇は白根光夫氏（昭和二十三年油画科卒）に執筆して頂いたものである。〕

私が東京美術学校油画科に入学したのは昭和十八年であった。国は二年前、既に所謂「大東亜戦争」に突入していた。三十五名の同期のクラスの中で、現役で入学出来たのは僅か五名で、あとは浪人九年というのが筆頭で、みんな錚々たる浪人の強者ばかりで、我々現役は、この小僧ッ子がとばかり連中に見下されていた、そんな感じがあった。美術学校油画科といえば、凄い天才ばかりだろうと、クラスの人たちの絵を見ていたけれど、そんなでもないやと、ホッとした事は確かだったが、一人だけ、これは凄いと思ったのがいた。その男は間もなく気が狂ってしまった。

入学した当初から画材不足に悩まされ、キャンバスは、ヌードの固定ポーズを描き上げて提出し、それが教官室からもどって来ると、必ずホワイトで塗りつぶし、次の制作に当てていた。解き油も不足がちで、仲間の一人は、筆が石鹸で洗えるのだからと、石鹸水を解き油の代わりにしたりした。ヌードの為の暖房の燃料も不足し、動物園との境の板塀を金網を残して壊し、ストーブの燃料にした事もあった。

ともあれ、みんなはあと一、二年で軍隊に行き、何れ国を守る為に死んで行くのだと覚悟していて、材料不足だろうが、食料不足だろうが、この現在を「描く」ということで充実させようと懸命だった。その頃の「描く」というのは、描写技術を向上させる事だったし、又、絵画とは一体何だという問題もあり、その二つの相剋に夢中になっていった。

こうして、瞬く間に一年たち、昭和十九年、教授・助教授の人事に大変動があった。つまり、それまでの官展系の先生方が止めて、在野系の先生方に代わったのである。油画科は教授に梅原龍三郎・安井曽太郎、助教授に久保守・硲伊之助、やや遅れて伊藤廉の方々が就任され、日本画科は教授に小林古径・安田靫彦、助教授に田中青坪・山本丘人、講師に奥村土牛ほかの方々が就任された。私たちは、あの梅原・安井が教えて下さる！　と興奮したのだが、同期の人の中には、えーッ、あんな画家たちが、とがっかりして、教室に出て来なくなった人たちも可成りいた。だが、もうその頃は、クラスの人たち半分以上は軍隊に行ってしまっていて、残った人たちも、勤労動員という事で、学校に行けない月が何度もあった。

勤労動員といっても、工場に行き体力を使わなければならぬ事は稀で、例えば、航空隊に派遣されると、既に飛行出来る練習機は不足し、模型の操縦席の中で飛行訓練をする様な状態になっていて、その模型の置いてある部屋の下部一面に、恰も空中を飛んでいる事を実感させる為に、空中から見た地上の様子を描く……といった